

2014 北の大地 一風の記憶



2014年7月9日(水)

自宅(15:40)——南部・東部自動車道——仙台港フェリーターミナル(16:15)(19:40)~~太平洋フェリー「きたかみ」~~ (25km)

いつものことながら、午前中で仕事を終えて家に帰り、準備していた荷物をバイクに積み、僅かな小雨の中を出発した。小雨は南部道路の途中であがり、東部道路を走っているうちに濡れたウェアはすっかり乾いた。

フェリーターミナルで会った福島からのライダーはズブ濡れだった。福島は大雨で、「雨の東北道はひどかった」と言い、「どこからですか」と聞いてきたが、「すぐそこ」と答えるのが悪いような感じだった。

「北上」は空いていた。新しい「きそ」と「いしかり」は人気があって混んでいるが、古い「きたかみ」は敬遠されている。乗船してすぐにレストランで赤ワインを飲みながら食事をしたが、「いしかり」、「きそ」と比べるとメニューの内容が落ちる。消費税の関係なのか、以前の「きたかみ」よりも内容が良くない。今回は旅の後半で春日さん、関水さんと会う予定なので、一人静かに飲むこととなった。

7月10日(木)

~~苦小牧フェリーターミナル(11:00)—R234—早来—D59—D74—D131—R237—日高—占冠—山部—D985—富良野 ロッジ・アイガー (199km)

フェリーから下りた途端、冷たい風が吹いていた。海風だ。そして、かなりの風の強さだ。バイク走行に強風は疲れるので、当初予定していた海岸線のルートを変更にした。北海道に上陸したときは必ず寄るガソリンスタンドで満タンにして、R234を北上し、早来で右折して内陸部を走ったが、案の定、風は苦にならないほどだった。勇払原野を切り開いた道沿いはサラブレッドの産地でもあり、広大な放牧場にはいかにも速そうなサラブレッドが寛いでいた。北海道はこの時期、栗の花が満開で、独特のむせるような臭いと、少し発酵しかけている牧草の臭いの中をしばらく走ることになった。

D74 沿いは水田と畑作地帯が続き、特に、広大なカボチャ畑では、少し濃い黄色の花が目につき、自分のちっぽけなカボチャ畑と比べ、こんな広いカボチャ畑の収穫は人力であるのか、機械に頼るのか、と考えてしまった。

占冠道の駅でお昼を食べるためにバイクを止め、燃料コックをオフにするためコックレバーに触ったところ濡れている。よく見ると赤い液体がコックレバーに滲んでいる。ガソリンが漏れているのだ。しかし、極微量なので、不安を感じながらも富良野まで走った。定宿のロッジ・アイガーには 3 時過ぎに着いた。北海道のへそにあたる富良野は、北の大地を旅するに者のベースキャンプとして丁度良いし、何よりロッジ・アイガーは自分にとって我が家のような気持ちになれる雰囲気のある宿である。珍しくライダー2人と外国人3人が同宿だった。今年からロッジ・アイガーは朝食のみのシステムをとることになったが、自分だけは夕食も用意していただき、オーナーの佐藤さんとゆっくりとお話をしながら美味しい富良野ワインと家庭料理を味わうことができた。

7月11日(金)

ロッチ・アイガー

二人のライダーが出発の準備をしていた。一台は CB1000、もう一台は珍しくも、遠目に格好よく見えるトライアンフだった。トライアンフといえば、スティーブ・マックイーンの「大脱走」で有名になったバイクで、オールドファンにはたまらない魅力を感じる。66歳の東京のオーナーは、去年までハーレーダビッドソンに乗っていたが、歳と共に取り回しの重さに限界を感じ、トライアンフにしたと言っていた。その気持ちはわかる。走っているときは重さを感じないが、止まっているときは300kg超の重さに閉口する。

朝方、宿の正面に望まれた十勝岳連峰は、その後真っ黒い雲に隠れて何も見えなくなってしまった。天気予報によると、14日より天気は安定するようなので、当初の予定では12日登山だったが、13日に層雲峡ユースホテルに入り、14日登山開始に変更した。従って明日もアイガー泊まりだ。

7月12日(土)

ロッチ・アイガー

明るい日差しを感じて目を覚ましたが、涼しいくらいの爽やかさだった。特別することも無く時間をもてあまし気味だったので、暑くならないうちにロッチ・アイガーの庭の水撒きを1時間程行った。

昼前に街まで歩いて行き、馴染みの釣具屋で釣り情報を伺った。釣りの情報ほど当てにならないものはないのだが、いろいろな話を総合的に判断すると、どうやら忠別ダムの流れ込みが穴場的ポイントのようだ。

帰りも歩いたので往復8キロあまり歩いたことになり、登山前のウォーミングアップに丁度良かった。歩きついでに、アイガーを通り越し、ホテル・ベルヒルズのラベンダー畑に行ったら、同じ場所に去年も咲いていた青い花が咲いていた。写真を撮ってからホテルの従業員に聞いてみたが、誰もわからなかった。あまりにも綺麗な青い花なので、ますます名前が知りたくなったが、どこに聞いてもわからなかった。

十勝岳連峰からトムラウシ、旭岳にかけて、真っ黒い雲に覆われていた。予定通りの縦走をしていたら、悲惨な目に遭っていただろう。ひたすら待つことしかないが、気持ちを登る事に集中した。宿に帰ってから、釣りの仕掛けの作り方をしたり、フライフィッシングの振り込みを、アイガーの庭で繰り返し練習をした。今夜は愛知県の豊橋から車で旅行をしている老夫婦と同宿だ。

7月13日(日)

ロッジ・アイガー —(バス)—富良野駅—(JR)—旭川—(バス)—層雲峽

層雲峽ユースホステル

【縦走出発】

山は相変わらず真っ黒い雲の中だが、天気予報によると、明日から5日間ぐらいは安定した天気が続くらしい。決行だ。縦走の場合は登山口と下山口がかなり離れてしまうので、バイクはアイガーに置いて、登山口の層雲峽までバスと電車を乗り継いで行くことにした。毎年のことだが、この時期の富良野、旭川間の電車は中国人に乗っ取られてしまう。中国人は辺り構わず大きな声で喋り、日本人は肩身の狭い思いをしている。中国人に目立つのはサングラスとカメラはキャノンだが、服装のセンスは、日本人の成金を彷彿とさせるようなもので、どぎつく最低だ。

層雲峽にバスが近づいても大雪山は雲の中だ。層雲峽バスステーションから層雲峽ビジターセンターまで歩いて行き、明日からの詳しい山の天気予報を確認したが、やはり、明日からは回復しそうだ。しかし、層雲峽ユースホステルに歩いて行く途中で雨が降ってきた。一抹の不安はあるが、天気予報を信じて前向きに考える事にした。ユースのオーナーは相変わらず人の良さそうな顔で迎えてくれた。

ユースへの到着が早すぎたので、ホールで休んでいると、一人の中年の女性が話しかけてきた。札幌からの人で、ほとんど毎週、北海道の山に登っており、自分が明日登る予定のルートは、先々週登ってきたと話していた。それによると、今年の山の雪解けは早く、それに伴って花の開花も早いと言っていた。大雪山系だけでなく、北海道のほとんどの山に登っており、夏山のみならず冬山まで登っていると言う。しかも、ほとんど単独行で、3泊前後の縦走が多いと言っていた。札幌郊外の野幌の田舎で小さいときから野生児のように育ってきたためかもしれないと話していた。釣り情報同様、全て鵜呑みにするわけではないが、今後のためにも色々参考になった話だった。痩せた体のどこにそんな並外れた体力があるのだろうかと思ったが、翌日その一端を垣間見ることになった。

7月14日(月)

層雲峽ユースホステル(6:00)—(バス)—銀泉台(7:10)・・・赤岳(2078.5m) (10:40)・・・
白雲分岐(11:30)(12:00)—白雲岳テントサイト(12:30)

白雲岳テントサイト

【怪物の山女】

ユース前から6時発の赤岳登山バスに乗った。昨日の女性を含めて20名ほどの乗車だった。以前乗ったときは4名だけだったから、今日は意外と多い。そのうち縦走の装備をしているのは4、5名だけだった。層雲峽ロープウェイを使えばバスなどに乗らなくてもよいのだが、黒岳までの登山者が多すぎて、静かな登山ができない。そんな訳で銀泉台までバスで行き、赤岳から縦走路に入ることにした。

昨日の女性も同じ考えで、今日はひさご沼でテントを張ると言っていたが、普通はそこまで2泊するので、驚いて「今日、そこまで行くんですか」と聞くと、「歩くのは平気で、多いときは1日40km歩く時もあるよ」と平気な顔で言う。単独は自分と彼女だけだったので、団体さんを先にやらせ、ゆっくりと出発する準備をした。彼女はまだのんびりとたばこをふかしていたので、「先に行くよ」と歩き始めた。しばらく歩いた頃、後ろから彼女が追いつき、「お先！」と抜いていった。大きなストライドでキックするような歩き方で速い。自分と同じような大きさのザックを背負ってのあの歩き方は、登山の常識の歩き方ではない。そして更にその後、遠くを見渡せる地点で驚いた。遠くに見える雪渓を独特の歩き方で登っているのは彼女で、しかも、団体さんも全て追い越して、まるで加速しているように先頭を歩いている。若い男でもあのスピードにはついて行くのは大変だと思う。どこに下山したのか知らないが、この後、彼女の姿を見ることはなかった。何か、怪物を見たような思いがつかまとった。

こまくさ平のコマクサは健在だったので安心し、ザックを下ろして写真を撮った。高根ヶ原のコマクサの群生にはかなわないが、2時間弱の登りでこんなにすばらしいコマクサの群生を見ることができるのは他にあまりないと思う。途中で写真を撮りながらのため、コースタイムより30分遅れで赤岳に着いた。ここからは、大雪の主峰旭岳、北海岳、北鎮岳と展望が広がる。天気は予報通り雲は多いが回復に向かっているようだ。白雲岳分岐でお昼にしたが、肝心の旭岳方面はガスが濃く、白雲岳頂上からの絶景は期待できそうもない状況だ。そうであれば、白雲岳にわざわざ登る意味はないので、分岐から左折して白雲岳テントサイトへ直行することにしたが、12時半に着いてしまった。先客のテントが4張りほどあったが、良い場所にテントを張ることができた。テントを張り終え、サルナシ酒を飲みながらテントの中で体を横にして寛ぐと、心地よい疲労感がサルナシのアルコールと共に体中に広がった。

このテント場は白雲岳の北斜面の雪渓の傍にあり、広大な高根ヶ原の広がりの方々にトムラウシ山を望むことができ、周りは高山植物のお花畑でもある。何よりも、豊富な水場がすぐ近くにある。ここだけに2、3日泊まっても良いくらいだ。避難小屋の管理人が話しかけてきて「今年の旭岳の残雪は、雪解けが早いために、残雪の縞模様がいつもの年より細くなっちゃった」と言っている。明日の朝、天気が良ければ白雲岳に登ろうと思っていたが、意欲がなくなった。隣のテントの人は東京から来たそうで、夕べの雨でテントの中がびしょ濡れになったと寝袋などを乾かしていた。お昼を十分に食べていなかったもので、3時過ぎに夕食を食べることにした。今晚のメニューはどんべえの天ぷらそばと、アルファーマー米に牛すじ丼で、オニオンスープも体に染みわたる。

こまくさ平のコマクサ



【山で怖いのは雷】

4時には夕食を終え、早々とシュラフに入ったものの、こんなに早くはなかなか寝付けない。そのうちウトウトしたようだが、稲妻が TENT を明るくするので目が覚めた。遠雷だ。そして、だんだんと近づいてきて、TENT 内が明るくなるくらい稲妻と真上で轟く雷鳴に、無意識のうちに体が強ばっていた。そのうち、雨もふりだし、風も出てきて、一気に激しさを増してきたが、フライをつけているので、雨には安心できる。やがて雷も遠ざかった、と思っていたら、また近づいてきた。波状攻撃を受けているようだ。激しい雨の中を避難小屋まで行くのも危険だし、まんじりとしないうちをひたすら耐えて過ごすしかないという覚悟を決めた。自然現象の中では、人間はどうすることもできず、大自然に身をゆだねるしかないと思うが、落ちるときは落ちるのだ、などと達観は到底できない。そのうち、どうやら雷雲は通り過ぎたようだ。途端にお腹が空いてきて、サルナシを飲みながら非常食を食べた。まだパラパラ降ってはいるが、TENT の中は雨漏りも浸水もなく快適だ。



赤岳第三雪渓 左端の長い急勾配を登らなければならない



赤岳頂上直下のチングルマ



赤岳頂上 後方は後旭岳、その奥が旭岳だが見えない



白雲岳避難小屋テントサイト 手前が自分の愛用のテント 後方が避難小屋



テントの中は快適なので、小屋の中には泊まりたくない



自家製サルナシ酒を飲みながらの食事は至福の一時



遅くまで残る雪渓 そのために水が豊富 ただし、夕方になると極端に気温が下がる

7月15日(火)

白雲岳テントサイト(5:50)……高根ヶ原……忠別岳(1962. 8m)(12:00)

……忠別岳テントサイト(14:20)

忠別岳テントサイト

【濃霧の中の高根ヶ原】

強風で目が覚めた。テントのチャックを開けて外を見たら、濃霧で真っ白い世界が広がり、寒い。天気予報では青空が広がるはずだったが、山の天気は当てにならない。ここから先は適当なエスケープルートがないので、慎重な判断をしなければならないのだが、上空の天気は良さそうなので決行することにした。暖かい雑炊とスープで朝食を摂り、強風の中のテント撤収は大変だったが、雨は止んでいたのを助かった。これから進む高根ヶ原方面は濃霧のため、晴れていれば見られる広大な空間の広がりや全く見えず、ガスに覆われた岩礫地の中にある黄色のマーカを探しながらゆっくりと歩いた。高根ヶ原分岐を過ぎたあたりから、コマクサの群生地が延々と続いている。恐らくコマクサの群生地としては日本で一番広いのではないかとと思われる。ガスの中のコマクサはしっとりとして、高山植物の女王の名に恥じない美しさと妖しさも兼ね備えている。エゾコザクラが咲いている一



エゾキンバイとウコンウツギ

帯はピンク色のオーラが
辺り一面に漂い、周囲の
その他の植物をピンク色
に染めてしまいそうだ。
濃霧の中を歩き慣れると、
大自然のまっただ中に
いることを実感できて、
心豊になったような気分
になる。忠別沼の手前で
二人の若い女性と会っ
た。「ひさごから白雲に
行くんだけど、白雲のテ
ントサイトは熊大丈夫で
したか」と二人のうちの
年下の女性が心配して
いた。顔が似ているとこ

ろから20代前半の姉妹のようだ。白雲のテントサイトには熊が良く出るということを知っていたようだ。「今の時期は大丈夫と管理人が言っていたよ」と言うと安心したように「ありがとう」と言ってガスの中に消えていった。

一昨年来た時、あれほど楽園のように思われた忠別沼の畔は、ガスと寒さのためか荒涼としており、のんびりと休憩をする気にはなれなかった。沼から忠別岳に伸びる木道の彼方に茶色い色をした大きめの動物が現れた。熊か、と一瞬身構えたが、熊にしては茶色いし、キツネにしては大きすぎるしと思っているうち、沼の畔の草むらをジャンプするように走って行った。今まで見たこともないような大キツネだ。写真を撮る暇も無いくらいの一瞬の出来



濃霧の高根ヶ原 マーカーが頼り

忠別岳へのダラダラ登りは飽きるが、ガスが流れる様を休みながら飽きずに眺めることができるのは、ゆとり登山のために心に余裕が生まれ、見えてくる部分があるのだろう。

ガスの中の誰もいない頂上は心細くなってくるし、切り立った断崖が不気味に思えてくるので少し下がった所で一休みをした。そこはチングルマの一大群生地帯だったが、花の盛りは少し過ぎていた。写真を撮りまくったが、こんなにスケールが大きいと写真を撮るのも難しい。何を中心にどのように切り取るか、などということを考えて写真を撮

ってはダメだ、というようなことを土門拳は言っていた。

大きな雪渓をトラバースすると、忠別岳避難小屋が見えてきた。テン場は少し下のようなのだが、4張りぐらいいしか張れないようだ。先客が一人いて、当然ながら一番いい場所に張ってあった。地形と風の向きなどを考慮して張る場所を決めたが、若干傾斜が付くが仕方ない。しかし、ここのテン場のロケーションは最高で、忠別岳と目の前の大きな雪渓を眺めながら食事ができるし、水場も近いし、小屋から離れているため静かに山を楽しむことができる。



強烈な色のタカネシオガマ

風が少し強いが、時折陽が射し、暖かくなってきた。おかげで、夕べの激しい雷雨で濡れたテントもすっかり乾いた。今晚の夕食はそうめんと野菜カレー。こういう所で飲むサルナシはことのほか美味しく、今日の飲み分はすぐなくなりそうだ。

隣のテントの人は、沼ノ原から登ってきたそうで、気持ちの良い40代後半の人だ。今日の行程は一度歩いているコースなので、悪天候も気にせず歩いたが、初めてだった



独特の構造土 輪が一杯

ら白雲で止めていただろう。好天の予報を信じて決行したが、全くのハズレだった。山の天候だから仕方ないが、おかげで悪天候でもそれなりの楽しみ方ができることを覚えた。今日のコースで会った人は、カップルと姉妹の女性と単独行の男だけだった。大雪山の代表的なコースなのに、なんと静かな山行だろう。



周りをピンク色に染めるエゾコザクラ



濃霧に濡れて、しっとりしたコマクサの大群落



忠別岳頂上 誰もいないし、寒い



忠別岳頂上直下のチングルマ大群落 見渡す限りチングルマだけ



忠別岳頂上直下のエゾツツジ 遠目にも目立つ派手な赤色 草のように見えるが、実は木である





忠別岳避難小屋テントサイト



後方に忠別岳の断崖絶壁が見える



テン場の前の雪溪 スプーンカットに夕陽が当たり、その造形を強調している



7月16日(水)

忠別岳テントサイト(5:10)・・・五色岳(1868m)・・・化雲岳(1954.5m)(8:20)・・・ロックガーデン・・・北沼・・・南沼・・・南沼テントサイト(14:15)

南沼テントサイト

【大雪山縦走の核心部へ】

朝焼けが石狩岳方面を赤く染めているが、まだ陽は昇らない。今日の行程は、距離はそれほどでもないが変化に富んだきつい登りがある。日の出をのんびり眺めているより、朝食を摂って早めに出発したほうがよい。テント場から再び稜線に戻り、朝陽を浴びて眩しいくらい五色岳へのダラダラ登りを歩き始めた。山に入って3日目だが疲労感はほとんどなく、体調はきわめて良好だし、朝の清々しい空気を吸って活力が全身にみなぎった。ハイマツのトンネルの急坂にさしかかったので、五色岳の頂上は間もなくと思ったが、そこから以外と長かった。過去の記憶は当てにならない。五色岳頂上に立つと、トムラウシ山の偉容がいきなり目に飛び込んできた。還暦の時登ったニペツ山も、特徴のある山容を見せていた。ここから化雲岳までは、雪渓もあるがなだらかなトレッキングコースだ。頂上手前のお花畑にはチングルマ、ハクサンイチゲ、エゾノツガザクラ等の大群生地が広がり、その彼方にトムラウシ山が鎮座している。また、右を見れば、旭岳、白雲岳、忠別岳が取り囲むように聳えている。化雲岳の頂上に立ったのは初めてだが、スケールの大きいお花畑と、北海道の屋根を見渡すことができるすばらしい山で去りがたかったが、ここからきついコースが待ち構えているのでのんびりできない。トムラウシ山と対面しながら簡単な行動食を食べ、ひさご沼からのコースが合流する鞍部への急斜面を下りた。その分、登り返しがあるのだが、上から見るとなだらかに見えるのに、実際登ると結構きつい。

【背筋痛との戦い】

この辺りから右背筋が痛み出した。初日の登りの時、不用意に雪渓に飛び乗った時に、転びそうになったのを堪えたため痛めた背筋痛に悩まされることになる。去年は、ザックの重量が25kgと重すぎたため、今年は15kg以内にまとめたのだが、想像以上に疲労感が軽減され、その分精神的に楽になり、山そのものを楽しむことができる。この背筋痛は予想外だったが、時々ストレッチをしながら、騙し騙し歩くことにした。

一昨年、この辺りはガスでほとんど見えなかったが、今日はどこまでも見える。しかし、最大の難所のロックガーデンにさしかかったとき、これから登る、巨岩が折り重なる全コースが望まれるのは氣勢を削がれた。前回のよう、ガスで見えないほうが良かったかも知れない。しかし、軽くしたザックのおかげか、ほとんど苦痛を感じずともなく登り切ることができた。途中、休憩しながら振り返って見ると、噴火のためにできた穴がポコポコ開いており、火山による造山活動の標本のようによくわかる地形だった。ロックガーデンの長い急登で一気に標高を上げ、やがて北沼に着いた。ここからトムラウシの頂上までは25分で行けるが、それまで比較的鮮明だった周囲の景色の色具合があせてきた。午後の光で見ると、午前の方が見た方が色も鮮やかだし、天気予報によると明日も天気は安定しているので、頂上アタックは明日朝にすることにした。しかし、この判断は裏目にでてしまった。

前回、濃霧と強風の中を北沼の畔にやっとたどり着いたとき、3人の登山者が大岩の陰で休んでいたのだが、その大岩が見当たらない。その代わりに、それと思われる場所に、まるで大岩を砕いたような岩が積み重なっていた。雷の仕業か、それとも自分の見間違いなのかかわからないが不思議でならなかった。そばで休んでいる同じ年齢好の登山者がいたので「前、ここに大きな岩がありましたよね」と聞いたら、初めて来たからわからないと言われた。

北沼から頂上経由でなく、北沼湖畔を辿って南沼に行くことにした。今回は濃霧の中、雪渓が終わったところで迷ったところである。今回は見通しがきくので、雪渓の次のルートがありそうな地形をよく見たら、大岩に黄色いマーカーが見える。雪渓が終わったら、上に登らずに真っ直ぐ進めば問題なさそうである。先行している単独の登山者が雪渓を渡り終わった地点から上に登り始めていた。どうやら、迷い道の踏み跡に惑わされたようだ。ここから見ると、迷い道が数本見えるほど迷う人が多いということだろう。先行者はどんどん上に登って行った。呼んでも聞こえないだろうし、視界は良好だから、そのうち間違いに気がつくだろうと思っていたら、かなり上まで行ってから気づいて下りてきたようだ。前回の自分と全く同じ間違いだ。ただ、この天気では周りを良く観察すればわかりそうなものだが、それだけもっともらしい迷い道が多いのである。自分よりかなり先を歩いていたのに、正規のルートに戻った時は相当後ろになっていた。本人にしてみれば、あまり格好のよいものではないので、自分も気がつかないふりをしていた。

南沼テントサイトには既に6張りほどテントが張られてあった。ここのテント場は標高2000m近くで、トムラウシ山頂上直下の開放感に溢れたお花畑の傍にある。雪渓から綺麗な水が流れ出しているが、一番上流の良い場所を確保し、小石をどけて、風の向きを確かめてから設営をした。3日目ともなれば、テント設営も要領よくなり短時間で終了した。

まだ時間は早いのと、背筋痛がひどいので、テントの中で背中を伸ばし、サルナシを飲みながら寛ぐことにした。寝返りを打つのもままならないくらい背筋が痛い、他には筋肉痛もなければ体調は良好で食欲もある。テントに寝転がっていると、雪渓からの流れだしの音が瀬音のように聞こえて心地よい。いよいよ明日下山だが、あと2、3日いたいくらいだ。残りのサルナシはあと少しになってしまった。このトムラウシ山は他の山と違い、神々しく神聖な雰囲気にも包まれている。大雪山系の奥座敷に鎮座し、たどり着くまでの道程が長いため、登った人には、他では経験できない達成感を与えてくれる。それ故に登山者にとっての憧れの山になってしまった。

それにしてもツアー客が多い。10年前の大量遭難死が風化してしまったのか、近くの山小屋は超満員らしい。その中でも人気のひさご沼避難小屋では客同士のトラブルが昨夜あったと泊まった人が話していた。原因の一つはツアーの人が先に場所取りをしていたことらしい。大雪山系の山に限らず、北海道の山には予約しなければならぬような山小屋はほとんどない。あくまでも避難小屋なのである。自分は山でそんな不愉快な思いはしたくないし、何よりもテント泊ほど自然に一体となれることはない。もっとも、雨と強風、そして何よりも雷は困るが、それも自然なのである。

この山はご多聞にもれず、中高年の人達が多いが、若い人達も以外と多い。隣のテントも大学生らしい男のグループだが、夜のマナーも良く、遅くまで騒いだりはしない。少し離れたテントは若い女性だけのグループだ。偶然なのか、今日の単独は自分を含めて2人だけのようだ。

【最後の山食の夕食】

4時を回ると急激に寒くなり、上下のダウンにレインウエアを羽織って最後の夕食の準備にとりかかった。今晩はラーメンに牛丼と麻婆ナス、フカヒレスープである。もっとも、全てお湯を沸かすだけで意外なほど美味しく食べることができる。最近の山食は種類も多く、味も下手な料理よりは美味しく、手軽にできるので重宝している。

7時を回ったのに小鳥のさえずりが続いている。チュルチュルチュリと盛んに鳴いているが、何の小鳥かはわからない。サルナシが遂にスッカラカンになった。富良野の宿に戻ればあるのだが、どうしようもない。

それにしても、人々はこんなに苦しい思いをしてまで、どうして山に登るのだろうか。ツアーのほとんどは100名山に登るのが目的のようである。100名山とは本当にくだらないものを作ったものだ。ただ単に個人的評価でしかないのに、あたかも、公的に認められたもののように受け取り、それを競って登ろうとする人達が現れ、一方で、それを商業ベースに乗せようと拍車をかける人達まで現れた。暑寒別岳やニペソツ山を100名山に入れなような選定は全く当てにならないし、名山とは自分にとっての名山で良いのだ。自分にとっての名山とは、近くでは蔵王山系の水引入道である。前半の優しい樹林帯と、後半のアルペンムードに溢れた景観のコントラストが見事で、何度登っても新鮮な感慨があせない。

これだけ苦労して登る事ができる精神力を持った人達が、山小屋で譲り合いの気持ちになれないのは、下界の煩わしい価値観をそのまま山に持ち込んでいるからで、本当に山に登りたいという思いとは別物のようだ。

自分にとっての山登りとは、以前からそうであるが、自分との対話である。作品制作のこと、家族、社会のこととか、取り留めも無く幅広である。登山は人から強要されて登るわけではない。苦しくて嫌だとなれば、途中で止めればよいという選択もあるし、止めても誰も非難をする人はいない。しかし、そうであればあるほど止められなくなってしまう。急坂を登るのは肉体的にはきついが、自分との対話を続けているうちは、以外と楽に登ってしまうことになる。勿論、花や景色を眺め、写真を撮ることは言うまでも無い。だから、自分の山歩きは時間がかかるのである。



五色岳頂上に立つと、いきなりトムラウシ山の偉容が飛び込んでくる



立派なハクサンイチゲ



天空の湿原 「神々の遊ぶ庭」とは良く言ったものだ



化雲岳頂上手前のチングルマ



化雲岳より旭岳(左端)方面を望む 手前のお花畑はチングルマ、ハクサンイチゲ、エゾノツガザクラが混成して見事



化雲岳よりトムラウシ山 今日のテン場はあの頂上直下



化雲岳頂上 背景は旭岳方面



化雲岳頂上付近



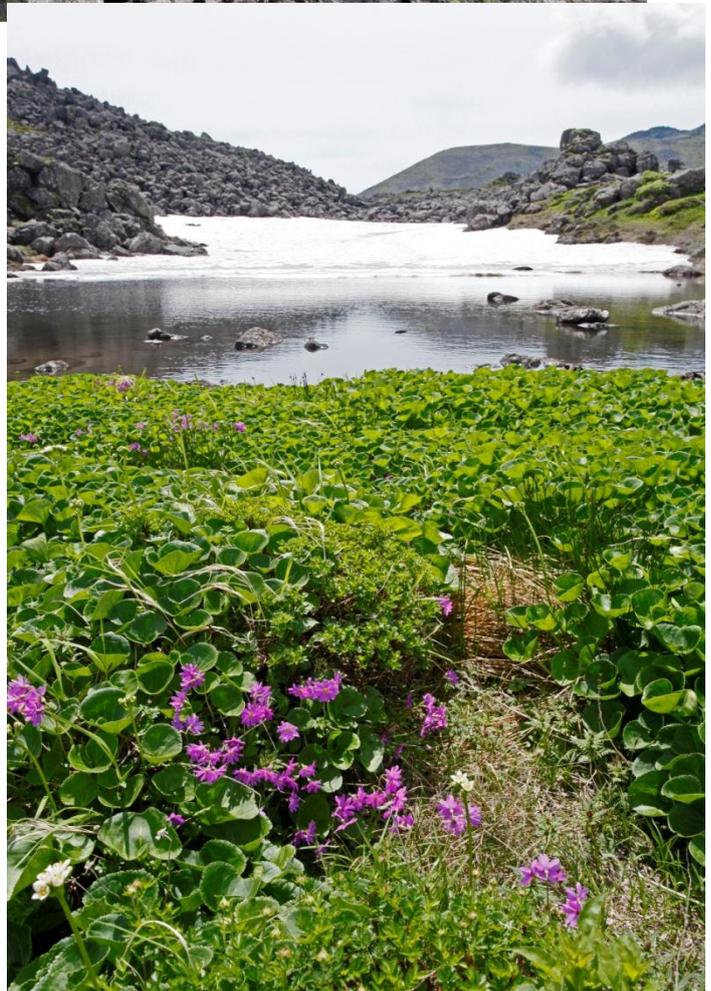
ハクサンイチゲの大群落 お花畑のスケールが大きい



トムラウシ山の全容 右端を登り、中央付近のロックガーデンを登り切った陰が南沼テントサイト



巨岩帯の登り マーカーが頼り(中央少し上)



この水を浄水器で濾過して飲む まずい！



難所・ロックガーデンの登り 遠目に見ると分からないが直径1.5m ぐらいの巨岩が折り重なっている急坂である



北沼とトムラウシ山 ガスがかかるとこの雪渓に惑わされる



北沼のエゾコザクラ



南沼テントサイト すぐ右側を雪溪からの清流が流れている

7月17日(木)

南沼テントサイト(7:35)・・・トムラウシ分岐・・・トムラウシ山(2141. 2m)(8:00)(8:25)・・・
トムラウシ分岐・・・コマドリ沢分岐(12:25)(13:05)・・・カムイ天上・・・トムラウシ短縮登山口
・・・トムラウシ温泉(17:00) トムラウシ温泉

【濃霧のトムラウシ山頂上】

テントのチャックを開けて外を覗いたら、濃霧が立ち込め何も見えない。周りも起きてはいるようだが姿は見えない。夕べも強い雨に降られたがテント内は大丈夫だった。濃霧は朝だけで、そのうち晴れるだろうと、またシュラフに潜り込んだ。しかし、今日の行程は長いので、あまりのんびりともしてられない。ガスが晴れるのを待つ間に朝食を済まそうと外に出たが、かなり寒い。フライは濡れており、テントの周りには強い雨のために泥のしぶきが跳ね上がっていた。外でお湯を沸かし、食事は寒いのでテントの中で摂った。朝は暖かい雑炊とラーメンとスープで体が温まってきた。

2時間待ったが、頂上近くのガスはなかなか晴れない。やむなく、今回は視界が悪くても頂上に立とうと出発し、トムラウシ分岐にザックをデポし、カメラだけを持って身軽になり、頂上を目指した。岩と瓦礫だけのコースと思っていたが、以外と花が咲いていて、こんな所にコマクサまでヒソソリと咲いていた。頂上にはすでに3人いて、そのうちの一人は白雲岳の隣のテントの人で、「白雲で会いましたね」と話しかけてきた。ニコンの一眼レフを2台用意して、「写真を撮りにきたが、なかなか晴れない」と、ぼやいていた。頂上には三脚を持ってこなかったのも、その人に登頂記念の写真のシャッターを押してもらったが、「標準点も入れようか」と数枚撮ってくれた。ガスは頂上だけだが、視界は全くきかない。分岐まで戻ると薄日が射しているが、頂上だけは相変わらずガスの中だ。

この頃になると、今朝、トムラウシ温泉から登ってきた人達と挨拶を交わしながらの下山となった。挨拶がてら聞いてみたら、早朝3時に登山口を出発してきたそうだ。このコースの下山はアップダウンが激しく、大岩の急勾配のため気を抜けない。コマドリ沢は雪に覆われていたが、雪の上の歩きは月山夏スキー合宿で慣れているので、涼風の中を気持ちよく下りたが、今年の雪渓は異常なくらい長い。スキーを履いたらアツという間に下りることができるのと思いつながら下った。コマドリ分岐でお湯を沸かし、もやし味噌ラーメンを食べ、その後コーヒーを飲んで休憩をしていると、今朝登った人達がどんどん下りてきて、一様に昼食を食べ始めた。カムイサンケナイ川とコマドリ沢との合流点は雪渓が切れ、冷たい澄んだ水が流れているので、休憩地点としては最高だ。

ここから尾根まで上がる急登の30分が、下山で筋力を消耗している下半身に追い打ちをかける。今回は荷物が重く、途中で何回か休まなければならなかったが、今回は軽くしたためか、一度も休まずに尾根まで登り切ることができた。後は尾根上をひたすら下るだけだが、この下りがとてつもなく長く感じられる。下山の人達はほとんどカムイ天上で休憩するが、休むなり異口同音「いや～、長い長い」と言う。それにしても、この山は懐が深く、なかなか山から出してくれない。下山途中、登山道補修用の丸太材を背負い上げる二人ずれとすれ違った。親子のようで、子供は中学生のようだ。太さ15cmで長さが1m20cmくらいの丸太を10本以上背負っている。登山者が歩きやすいようにと登山道を整備していることには日頃感謝していたが、この作業を目の当たりにすると自然と頭が下がる。「ご苦労さん。有り難う」と言うと少し微笑んで軽く会釈をして登って行った。

下山してのトムラウシ温泉は5日ぶりの風呂で、汚れを綺麗さっぱりと洗い流し、透明感のある湯に浸りながら、縦走の達成感に酔いしれ、今回も無事に下山できたことに感謝をした。



晴れていれば、背景に旭岳などの大雪連峰が望めるのだが・・・



頂上からの景観



頂上からテン場方面を望む



自然の悪戯



頂上直下のお花畑



前トム平からトムラウシ山 左端の雪渓上に登山道が見える



雪渓に覆われたコマドリ沢



3年前と同じ所に咲いていたイワギキョウ

7月18日(金)

トムラウシ温泉(9:00)—(バス)—新得駅—(JR)—富良野駅(13:05)—ロッチ・アイガー

ロッチ・アイガー

長い狩勝峠を越え、3時間の一両編成の列車での旅を終え、富良野に到着した。お腹が空いていたが釣りの餌を購入するため、いつもの釣具屋に寄った。

お昼は「独尊」で、評判のカレーを食べようとしたが、長蛇の列を見て並ぶ気はなくなった。結局、アイガーに帰ってから出前をとってゆっくりと食べた。今日は外に出る気力は湧いてこない。疲れから早々と寝てしまい、夜中の1時過ぎに目を覚まし、寝直した。

7月19日(土)

ロッチ・アイガー — 忠別ダム—ロッチ・アイガー

(159km)

ロッチ・アイガー

【美しいニジマス】

空知川と西達布川の合流点の絶好のポイントは見送り、忠別ダムに大物を求めることにした。ダムの釣りと言っても、止水の釣りはしたくないので、忠別川の流れ込みを狙うことにした。しかし、その場所を探すのに行ったり来たりと繰り返して、結局上流から川伝いに歩くことにした。食料と熊撃退スプレーを持って数十分下り、流れ込みに到達した。その雰囲気を見て、必ず大物がいると確信を持った。周りに障害物もなく、フライフィッシングには絶好のポイントだったが風が強すぎ、フライ初心者の自分にはキャストができない。そんな事もあろうかと餌釣りの準備もしてきていたので切り替えた。そして、2, 3回流した後、紛れもない目印の異変に胸が高鳴った。しかし、合わせをくれるのと同時に携帯の呼び出し音が鳴った。無視しようかと思ったが、大事な用件かなと携帯をポケットから取り出そうと竿を持つ手を替えた瞬間、道糸からはだらりとだらしく力が失せた。電話は友人からで緊急の用ではなかった。竿からの感触では大きかったのも、当然のごとく、友人にバラした事への八つ当たりをした。しかし、その直後、また当たりがあり、今度は確実に合わせることができた。大きい。竿を満月に絞り込みながら走り回り、ジャンプを2, 3回繰り返して針外しをしてきた。ニジマスだ。しばらくして水面に口を出させて取り込んだが、美しい魚体のニジマスだった。興奮しながらも、このくらいは当たり前のような態度をとり、さりげなく流れの筋を読んで餌を投入すると、また当たりがあった。すかさず竿を立てて合わせると、糸鳴りをたて、激しく引き込んだ。竿を寝かされたらおしまいなので、両手で竿を垂直に立て続けた。また、ジャンプを繰り返した。7.2mの本流竿に道糸2号、ハリス1.25号の仕掛けが心配になるほどの強烈な引きだ。やがて手元にたぐり寄せると、先ほどのより大きい魚体がネットに収まった。この調子だと幾らでも釣れるのかなと思った矢先、川の水が濁り始めてきた。上流の河川工事の濁りが入ってきたのである。渓魚は濁りが入ると途端に釣れなくなる。

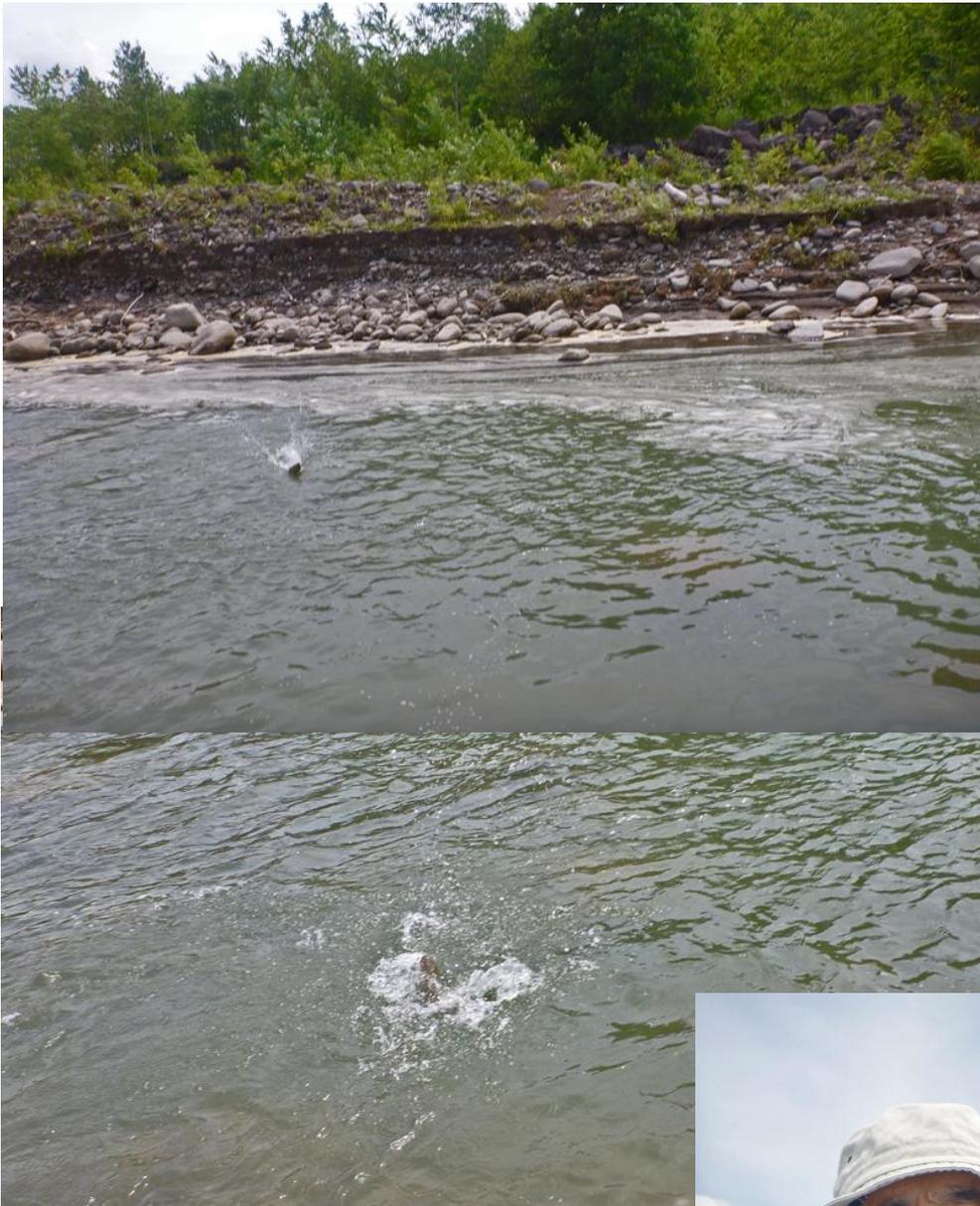
お昼を食べながら濁りがとれるのを待つことにしたが、なかなかとれないどころか、ますます濁りがひどくなってきた。

獲物の臭いがしたとみえ、キタキツネが近づいてきた。石を投げつけたら逃げて行った。熊だったらそうはいかない。途端に心細くなり、釣りをやめて帰ることにした。

忠別川の支流を遡っているとき、二人の釣り人に会った。「魚いないねえ」と言うので、「そんなことはないよ」というと、魚を見せてくれないかとのぞき込んできた。クーラーボックスの魚を見るなり、その大きさに驚いていた。釣り自慢はたわいもなく楽しい。

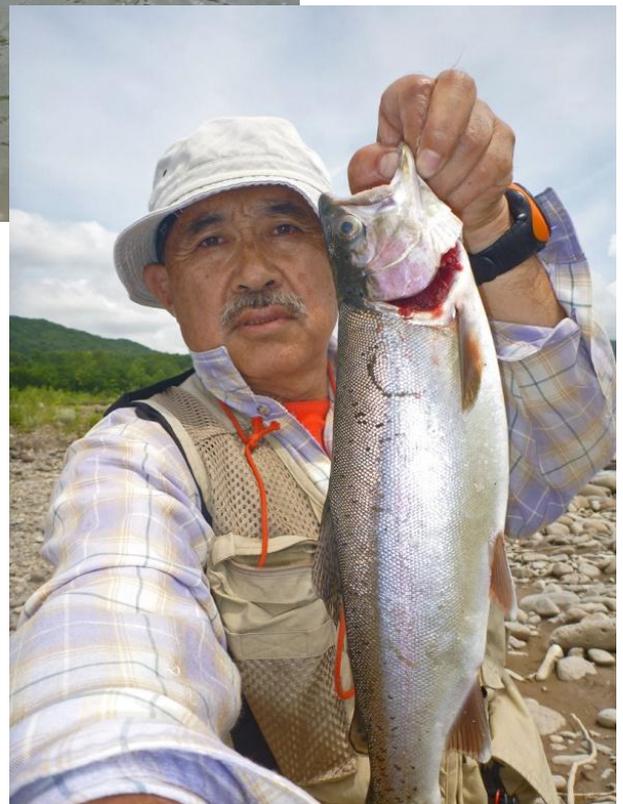


忠別ダムの美しいニジマス



激しく抵抗するニジマス

二匹目の立派なニジマス
自分撮りをしているので、魚は実際より大きく写っている





「雑」で富良野メロンをご馳走になった。麦焼酎を飲んだ後にサッパリしておいしい。

7月20日(日)

ロッヂ・アイガー —R237—D759—D581—D70—D580—R452—D37—D140—R39—留辺蘂—R242—
遠軽—R333—D493—瀬戸瀬温泉 瀬戸瀬温泉 (254km)

【当麻ロードオアシスのマドンナ】

今日は日曜日なので、国道を避けて、大好きな山沿いの信号無しの道を走った。美瑛の丘の裏手になるのだが、観光ルートから外れているおかげで、景色はいいのに車は少なく、快適に走ることができる。

旭川の街をバイパスしてオホーツク沿岸に行く途中に、当麻ロードオアシスがある。まさにオアシスで、車中泊の旅人達がよく利用している。ここに、数年前から顔なじみになった女性がいる。すごく明るい性格が旅人の疲れを癒やしてくれる。道北からの帰り道もここを通ると言ったら、お昼の弁当を用意してくれるということになった。一年に一回しか来ないような所に、このようにコミュニケーションを持つことのできる人がいるということは、嬉しい限りである。

大雪湖の上流の石狩川の源流の釣り場に行ったが、以前いい釣りができたポイントは、土砂の堆積で見ると影もない状況に変貌していた。それでも諦めきれずに竿を出したら、アメマスが一匹釣れたので今晚のおかずキープした。今日の宿は自炊の温泉宿だからである。宿に行く途中、釣り場の偵察を兼ねて、湧別川周辺を走り回ったが、良さそうなポイントは幾らでもある。昭和の臭いが色濃く残っている宿は盛況だったが、泊まり客は3組みだけで、あとは日帰り入浴の客だった。ここの温泉は評判が良く、近隣から温泉水を汲みに来る人達が絶えない。



当麻パークゴルフ場クラブハウスと当麻ロードオアシスのマドンナ

7月21日(月)

瀬戸瀬温泉—湧別川—遠軽—瀬戸瀬温泉—湧別川—瀬戸瀬温泉

瀬戸瀬温泉 (95km)

朝になると、近隣から続々と入浴客が来た。温泉の主人と話し込んでいる様子から、ほとんど常連客のようだ。キャンピングカーで旅行中の人も、車の中から洗面道具を持って出てきた。自分は温泉ではなく、湧別川に行ってみたが、良さそうなポイントには全てに先客がいた。今日は祝日で世間一般は休みなのだ。それでも、大きな堰堤の下流のポイントで、今日も風が強くフライは振れないので、餌釣りで試してみた。しかし、釣れてくるのはウグイばかりだった。地元の人が「ウグイばかりだろう」と話しかけてきた。「去年は良かったが、今年は全くダメだ」とぼやいていた。去年は60cmのニジマスを数本上げたこととかを話していた。そして、仙台から来たことを知って、近くのヤマメの釣れる川を教えてくれたが、大物狙いにはあまり乗り気になれなかった。次のポイントの野上橋も、3人も釣り人が既に入っていた。気温が27度もあるし、体力を消耗するだけなので宿に帰って昼寝をすることにした。お昼は、昨日釣ったアメマスを開きにして、塩と醤油で下味をつけ、冷蔵庫で一晩水分を抜いて干物にしたものを焼いて食べたが、思いの外美味しかった。

午後は、宿の人に教えてもらったポイントに行ってみた。広い河原と程良い瀬が続いているので、フライには絶好のポイントだが、風が強すぎるし時間的にも早いので餌釣りにしたが、竿を持つのも力があるほどの強風だ。何回か流しているうち、当たりがあり、強烈な引きが始まったが、一瞬だけで続かない。ウグイの大物だった。その後、釣れてくるのはウグイばかりだった。夕方に、フライで挑戦したが、風が強くなかなか振り込めない。風下に振り込んだりして工夫したが、思うように毛針は流れしてくれない。5時半まで試みたが全く釣れないので降参することにした。夕食の食材をコンビニで買って宿に戻った。宿の主人が「どうだった」と期待を込めた顔で出迎えてくれたが、釣れなかったことがわると、時期がわるいのかなあと言いながら、「釣れなくても、気持ちのいいポイントだったでしょ。そういうときもあるのが釣りだよ。」と悟ったようなことを言っていた。



自家製アメマスの干物(昼食)



【この日の夕食】

つぼだー一夜干し、しめさば
野菜炒め、レタス、ビール、酒
おにぎり

7月22日(火)

瀬戸瀬温泉—R333—遠軽—R242—湧別—R238—紋別—R238—興部—R239—下川—D60—
幌内越峠—D49—D120—天の川トンネル—歌登—D12—小頓別—R275—ピンネシリ道の駅—D785—
知駒岳—D583—D785—D84—豊富温泉—サロベツ原野—D444—D106—抜海

ばっかす

(369km)

前回泊まった時は熱すぎた温泉も、今年は少し温めで丁度良い湯加減なので、朝風呂にゆったりと浸かり、北へ出かける準備をした。今日の目的地は稚内の手前にある抜海までである。国道40号とオホーツク沿岸との間の山岳地帯を走るルートに決めた。遠軽から滝上に抜ける道路を走りたかったが、今日の行程を考えると少々無理なので、興部までは海岸線を走り、そこから下川へ入り、あとは北海道でも人口密度の少ない山岳地帯をひたすら北上することにした。天の川トンネルを抜けて歌登に至る100kmあまりの道路は本当に心細くらい交通量がない。1時間あまりノンストップで走って出会ったのは、バイク3台、林業トラック数台、それにキタキツネ2匹、乗用車は無しだった。長さ1353mの「天の川トンネル」の中は、ロマンチックな名称とは裏腹に震えがくるほど寒かった。

富士山型の敏音知岳の麓にあるピンネシリ道の駅は、全国で一番寂しい道の駅ではなかろうか。ここを過ぎて、いよいよ今回のコースの最大の難所である知駒岳(529m)越えが始まる。高速ワインディングコースをどこまでも何処までも登って行く。あのコーナーの次は頂上のはずだとコーナーを抜けてバイクを起こして前方を見ると、天空に登るように道は続いている。あげくの果て、2、3日前から吹き続けている風が、頂上付近で一段と強くなり、380kgの重さのバイクも大きく煽られて蛇行運転になってしまう。たまにライダーとすれ違いますが、お互い「よくこんなルートを選んだものだ」というような表情をして挨拶し、走り去った。

豊富の手前から雨が降り始め、道道106号を走る頃は、海からの強烈な風雨が、ヘルメットのシールドの内側まで濡らし、視界不良のまま走るようになった。例年、咲き誇るスカシユリなどの花は全く見られない。しかし、気持ちはそんなにめげることもなく、嵐の中を切り裂くように走った。2年ぶりの懐かしい「ばっかす」に着くと、バイクの音を聞いてオーナーが迎えに出てきてくれ、バイク車庫のシャッターを開けてくれた。そして、ズブ濡れのウェアをハンガーに掛けて乾してくれた。サルナン酒をのんで一息ついてから、サロベツの梶原さんに電話をして、明日の午後に訪れる約束をした。電話をしたら、「今年は来ないのかなと、話していたところだったよ」と待っていてくれたのだった。

今晚の客は6名で、一緒に夕食をご馳走になったが、ここの宿の食事は地場産の食材をたっぷりを使い、ボリュームもあり美味しい。ちなみに今晚のメニューは、ホタテとサケのフライ、ホタテとボタンエビの刺身、長芋とエノキの酢の物、ホタテとマカロニのグラタンという健康的な内容だ。そして、生ビールを始めたのは嬉しい。自分が泊まる「とほ宿」はどこも食事がすばらしい所ばかりである。女4人に男2人だったが、上富良野在住のおばさんは、食後の飲み会で話せばよいような内容の話を長々と話し、せっかくの美味しい食事が半減してしまった。宿の人の片づけが遅くなるのにも無頓着な人だった。

7月23日(水)

ばっかすーD106ー稚内ーR40ー豊富バイパスー豊富サロベツ ICーサロベツ原野ーD106
ーD254ー富士見 メイロード (136km)

いつもの大漁旗で見送りを受け、10時過ぎに出発をした。燃料切れが心配なので、稚内で給油をして豊富バイパスを南下し、大規模草地に行った。それにしても、こんなところにこんな立派な道路が不思議でならなかったが、後でわかった。

大規模草地放牧場は観光地化を狙ったのだろうが、当てが外れたとみえ、金をかけた施設は廃墟になっていた。映画「坂の上の雲」のロケ地には、訪れる人もなく、大砲が赤く錆びたままだった。

サロベツ原生花園は以前の場所から移っていた。これまた金をかけた立派な施設を作ったものだが、前の場所のほうが良かったかもしれない。湿地再生のプロジェクトの一環なのかわからないが、現在の施設の周りはただの荒野で、かなり歩くことをしなければサロベツ原野は見られない。自分はそれでもいいが、観光バスで来た人達は戸惑うのではなからうか。泥炭採集の施設の説明が加わったが、自分としては興味が持てた。荒野を抜けて木道をしばらく行くと、サロベツ原野が果てしなく広がっていた。時期的にエゾカンゾーは終わり、タチギボーンはこれから咲くようなのでまだ蕾みだった。ここで、高層湿原の意味がようやくわかった。泥炭層の堆積のできるものであり、高地の湿原という意味ではなかった。また、泥炭の生成方法と活用方法も分かったが、はたしてどのくらい利用されているのか、地球に優しいものなので大いに活用したいが絶対量が少ないのではないだろうか。また、恥ずかしい話したが、亜炭と泥炭の違いをやっと認識した。どっちにも炭がつくが、泥炭は炭ではない。

【道北のサロベツから発信し続ける活動家・梶原幸喜氏】

梶原さんの家には2時頃伺った。NPO 法人サロベツまきば、核廃棄物の問題に対して、相変わらず精力的に活動を続けていた。そして、不登校児童に対しての支援活動までしていることを初めて知った。また、今回は梶原さんがサロベツに入植した当時の話しも聞くことが出来た。正確に言うと入植ではなく、開拓のための機械班の一人として入ったということだった。

毎年のことであるが、ここ最近の活動記録をまとめた印刷物をいただくのだが、A470枚程に及ぶものである。これだけの量の文章を書くだけでも大変だと思うが、読んでみると、いかに多方面に渡って勉強をしているかが感じ取られる。

サロベツまきば構想、核廃棄物処理場の問題に対する取り組みは、梶原さんのライフワークのようなもので、生涯をかけての活動である。

サロベツまきば構想は、梶原さんが長年唱えていた「酪農は楽農でなければならない」をモットーに、重労働のイメージからの脱却、女性でも簡単にできるカッコイイ農業を目指して、農業界に若者を増やし、活気のある産業にしようと考えている。今までの戸別の農業では限界があり、これから増えるであろう耕作放棄地の統合により、大規模農業が可能になり、TPP にも耐えられる農業経営が可能となるように、国に支援を働きかける活動を続け、ようやく実現の運びとなった。どのような形となるのか楽しみである。

幌延の核廃棄物処理場の問題は、梶原さん達の反対運動のおかげで白紙撤回となり、ケリがついていたものと思っていたが、推進派の考えはくすぶり続け、安倍政権のもとで燃え上がりそう。30年に及ぶ戦いはまだ終わっていないのだ。前述の豊富バイパスの謎が少し見えてきた。こんな辺鄙な所に立派な自動車専用道路はどう見てもおかしいと思った。核廃棄物の陸路での輸送は、沿線住民の問題を考えると、現実的に不可能と思われる。となれば、船での運搬となり、稚内港まで運び、幌延までは陸送ということになり、そのために立派な自動車専用道路が必要なのだ。

その戦いの経緯、そして、梶原さんを突き動かしているエネルギーの背景に及ぶ梶原さんの生い立ちまで書かれた A4 52 ページはよくまとめられているし、よくわかるものだった。その考えの底流には、私利私欲は全く考えず、サロベツのより豊かな農業を目指すことから始まり、隣町の核廃棄物処理場の問題を通して、本当の人間の幸福を考え、それを永久的に求める姿勢に貫かれている。52ページに及ぶ長文の中で、梶原さんらしい一面が書かれてある部分を抜粋する。

．．．．．幸せを呼ぶのは相手の傷みを察するところから生まれる。国同士もイコールです。血を流して勝ち取っても得られるものは???です。もうすぐリモコンで操作するような危険を伴わず、相手を危険に晒す戦争になるでしょう。宇宙から監視されているのだから．．．。

日本人は思いやりの心を持ち、諸外国から尊敬されています。それが本来の諸先輩が築き上げてくれた姿です。だからこそ二十世紀初頭～中盤には戻ってはならないのです。真の戦争の怖さを知る人も数少なくなっています。歴史の過ちを繰り返してはいけません。そして、優しく立ち上がって下さい。

最後の「優しく立ち上がって下さい」が、いかにも梶原さんらしい表現である。しかし、書いている内容、行動してきたことは実に厳しく鋭い。この柔和な姿のどこにそのような「力」が存在し、80になっても、衰えるどころか益々活動し続けることに感銘すら覚える。短い滞在の中では話しを十分に聞くことができないため、いただいた活動記録を読みながら、改めて感心した。

今回、不登校児童など問題を抱えた子供達の学校の支援活動も行っていることを知った。それは、上士幌にある「大地の学校」である。さっそくホームページで閲覧したところ、その紹介の動画を見るだけでかなりの時間を要したが、本当によくやっていると感心した。北海道の大自然の中で、などと言うと、自然塾のような、あるいはスパルタ的な教育を連想するかも知れないが、子供達に大切なことは、家庭を大事にした中での人間関係を大切にしていこうという「教育」だった。一昔前は当たり前のことだったが、当たり前のことが当たり前でなくなってきた時代になったのである。



サロベツの海岸線を走る道道106号線



梶原さん夫妻と毎年同じ場所で写真を撮っている

【異様に赤く燃えた日本海の落日】

サロベツから夕来への絶景ロードは舗装され走りやすくなっていた。メイロードのおばさんと再会を喜び、すぐに日本最北の温泉「童夢」に行った。いつもより客が少なく、のんびりと湯に浸かることができた。相変わらずこげ茶色の温泉だが、前より色が薄くなったようなので、聞いてみたら濾過など何もしていないと言っていた。天然の温泉だから、その時の状況によって濃淡の変化は当たり前かも知れない。

風呂からあがり、生ビールを飲みながら外を眺めていた。少し靄がかかっていたので夕陽は期待できないと思っていたが、以外といい色になってきた。急いでカメラの準備をして海岸に行った。不思議な光景だ。夕陽なのに空は赤くならず、太陽だけが真っ赤になって日本海へ落ちてきた。まるで磨りガラスを通して見ているようだ。400mmの望遠レンズに交換して狙いをつけて数枚撮っていると、ファインダー越しに水平線上に左から動くものが迫ってきた。船だ。利尻と稚内を結ぶフェリーだ。その船が、真っ赤な太陽の中に入ってきた。珍しい写真が撮れた。

夕陽を撮ろうと海岸に急いでいるとき、ジョギングをしている一人の女性とすれ違った。その女性も泊まり客だった。なんと、札幌から歩いてきたそうで、浜頓別まで560kmを歩き、その足で浜頓別100kmマラソン大会に出場するそうだ。地元の人がジョギングをしていると思うくらい軽装なので聞いてみたら、行く先々の宿にあらかじめ荷物は送ってあるそうだ。一日50～80kmを、歩くというよりジョギングをしながら来たようだが、何という驚異的な体力だろう。

もう一人の客は、初めて北海道にツーリングに来た埼玉の若者だった。自分もそうだったように、内地とは違う北海道の自然に驚きの連続だったと興奮して話していた。明日は札幌に行くと言っていたので、自分が来るとき来た「天の川トンネル」経由の内陸コースを勧めたら、宿のおばさんもそれがいいと同調した。はたして迷わずに行けたかどうか。

宿のおばさんは、今年で店をしめようと思っていると話し始めた。体が言うことを聞くうちに大好きな旅行をしたいためと言っている。確かにそれはそうだが、そのためにお気に入りの宿が一つ消えてしまうことになるのも残念だ。



「ばっかす」オーナーと出発の儀式。後方建物が「ばっかす」。



日本最北の木造駅舎 抜海駅



豊富大規模放牧草地



サロベツ原生花園



日本海の落日とフェリー 太陽だけが異様に赤い (400mm 望遠)



日本最北の温泉「童夢」



民宿「メイロード」のおばさん



宗谷丘陵 左上に微かであるが、オホーツクの海が見える。



道道106号線 左サロベツ原野 右日本海



白い道 前方の宗谷海峡に吸い込まれていく



宗谷丘陵とオホーツク海

7月24日(木)

メイロード—D254—D106—D444—D84—D121—沼川—D1119—D121—R238—D889—白い道
—R238—浜頓別

浜頓別ウイング

(214km)

【強風の道北】

D106 は晴れてはいるが、今日も風が強く、利尻岳は全く見えない。利尻が見えなくても、風が強くて、今日の106号線はただ走るだけで気分が良くなる。

エサヌカ線の直線道路

沼川を通る121号線は、牧場の中をひたすら走る。D1119号線を初めて走ったが、波打つ牧草地の丘が何処までも続き、一瞬、日本を走っていることを忘れさせるくらいに広い。R238に出たら一段と風が強くなった。最北のコンビニでおにぎりを買い、宗谷丘陵のサハリンを眺めることができる所で昼食としたが、サハリンは全く見えない。その後、今話題になってきた「白い道」を探したが、なかなかわからない。通りがかりのライダーに聞いたら、今行って来たところだが非常に分かりづらいと言っていた。案内は何もないが、ようやく探した。宗谷丘陵の緑の牧草地の中に、ホタテの貝殻を敷き詰めた白い道が、オホーツク海まで続いている。牧草地の緑の真ん中に白い道の構図は、東山魁夷の「道」を彷彿とさせる。



エサヌカ線の空に溶けこむ直線道路

オホーツク沿岸の宗谷国道は、海側から吹き付ける強風のため、危険なくらいの蛇行運転になってしまうので、それを矯正するために心身ともに疲れた。猿払公園で一休みをして、エサヌカ線の入り口から左折し、小さな集落を抜けると、そこには、空まで舞い上がるような錯覚を覚える直線道路が、牧草地を切り裂くような緊張感をもって地平線に溶け込んでいた。車は前後とも見えない。まるで、アラン・ダーカンジェロの「フリーウェイ」の絵画を見ているようだ。

雨もひどいが、強風がこんなにも疲れるとは思いの外だった。浜頓別で泊まることにした。ここにも「とほ宿」はあるが、この夕食のジンギスカン食べ放題は食べたくないの、少々値段が高いが、公営の浜頓別温泉ウイングにした。この温泉は塩化ナトリウム泉で、スベスベヌルヌルしていて疲れがとれ、癒やされる。

7月25日(金)

浜頓別温泉ウイングーR238ーマリーンアイランド岡島ー紋別ー湧別ーD656ー三里浜
ーD656ーR238ー浜佐呂間

さろまにあん

(213km)

今日の風は正面からで比較的楽だが、相変わらず強い。道の駅・マリーンアイランド岡島は丁度休みたくなる所にあるし、ゆっくりと休める雰囲気がある。

雄武手前で荒野の中の廃屋が目にとまったのでバイクを止め、廃屋の傍を抜けてオホーツクの海に出た。砂浜にはハマボーフーが群生していた。廃屋の周りの畑には栽培の痕跡があるので、所有者が時々来て栽培しているようだ。

【サロマ湖三里浜】

前から気になっていたサロマ湖の北岸の砂州の先端にある三里浜に行ってみた。自分の頭の中の地図では細い砂州が続いているのだが、実際は広い平原がどこまでも続いている。真新しい住宅が密集している集落を抜けると両側に海が望まれ、砂州の先端に来たなという雰囲気が高まってきた。そこは有料キャンプ場になっていた。キャンプ場の管理人は暇とみえ、色々な事を話してくれた。サロマ湖でホタテの稚貝を育て、外海での養殖が盛んで、登栄床漁港はその中心だと言っていた。サロマ湖の豊かな資源を基にホタテ漁で栄え、経済的にも豊で新築の立派な家が多い。仙台では津波が怖くて、こんな海拔0メートルのような所には住んでいられないと言ったら、「ここは大丈夫。アリューシャンの大地震でもせいぜい50cmだったから全く心配ない」と言っていたが、今回の東日本大震災はこのような考え方のために被害が大きくなった事もある。波打ち際に行ってみたが、この砂は砂というよりは米粒のように極小さい小石で、まだ砂に成りきっていない状態だ。

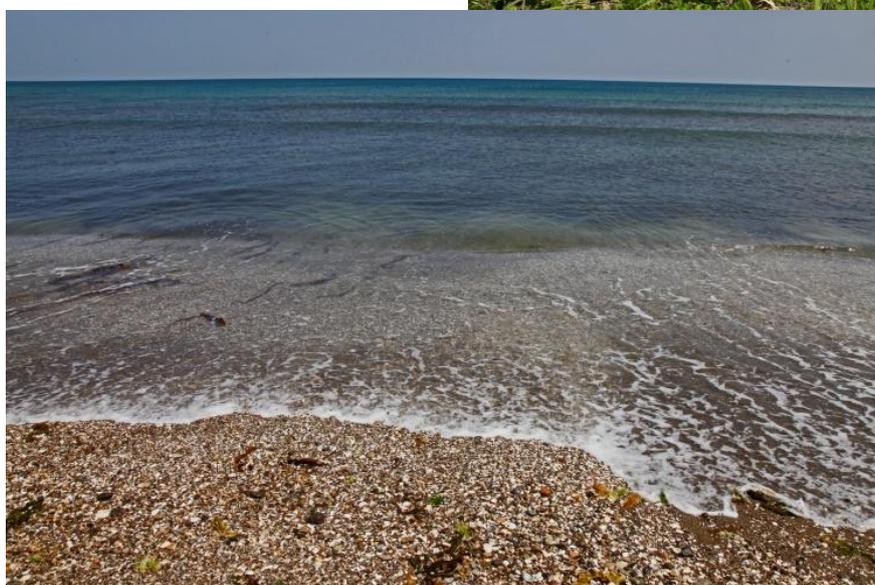
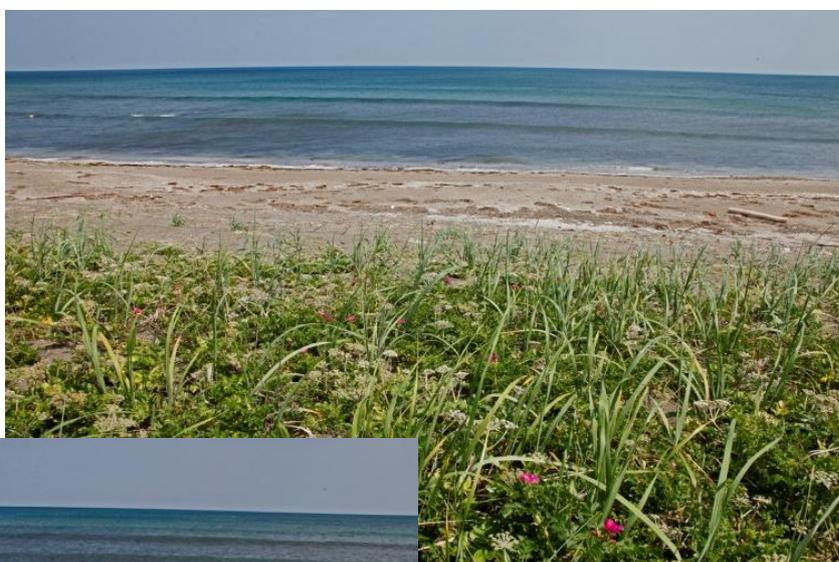


船の形をした道の駅マリーンアイランド岡島

2年ぶりの「さろまにあん」には3時半頃着いた。何回か泊まっている安心感と、強風の中を走ってきた疲労感で寝てしまったようだが、「温泉に行くよ」と言う声で目が覚めた。オーナーが近くの温泉に送迎してくれるのだ。同乗の男女は、北海道に魅せられて移住してきた若者だ。男は群馬、女は兵庫。男は十勝で農業、女は近くの温泉旅館で働いている。男は会社勤めを辞めて、何とかなるだろうと当てもなく北海道に来て、今は充実した毎日を送っていると言っていた。女は農業大学で農業を学び、農業をやりたくて北海道に来たが、女という壁なのか、農業の仕事は無く、今は温泉旅館の仲居をしているそうだ。二人とも休日はバイクで北海道を旅しているようだが、若さ故の決断は羨ましい。女はスーパーカブに乗って、旅人というよりは近所に用足しにいくような格好で走り回っているようだ。二人の共通の悩みは、結婚話しを持ちかけられることらしい。地元の人達は良くしてくれるのだが、なにせ地元には若者が少ないので、そういうことになるらしいが、二人とも、結婚をするために北海道に来たのではないと断り続けていると苦笑していた。移住して見える北海道、旅人として見える北海道の違いはどんなものかわからないが、自分は旅人として見る北海道が良い。

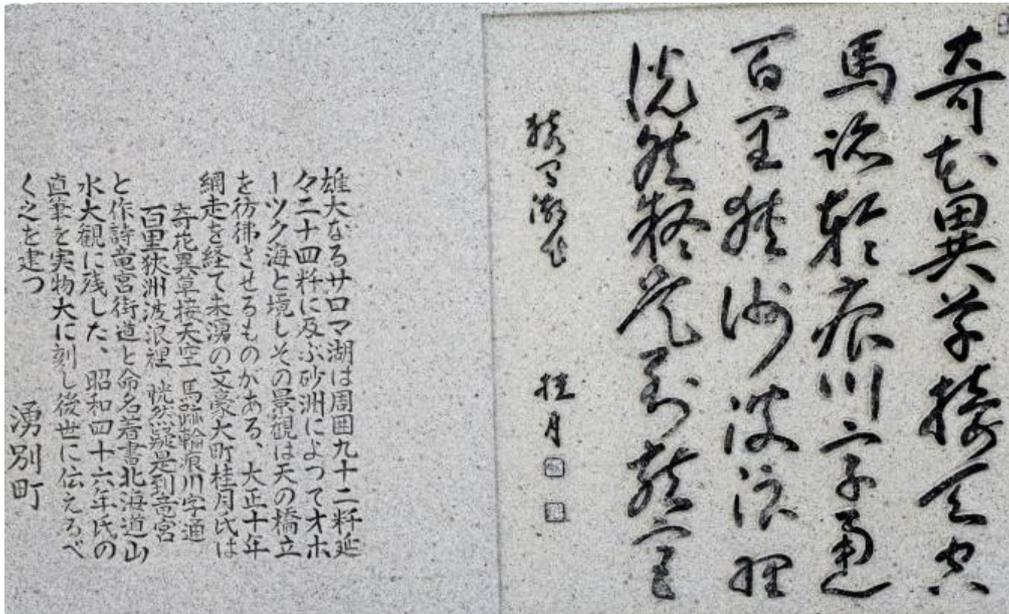
「さろまにあん」の食事もしみ一つである程おいしい。この時期はサロマ湖で捕れる北海シマエビ、ホタテの刺身など、地物を中心においしく料理をしてくれる。そして、他の「とほ宿」ではあまり見られないが、「さろまにあん」ではオーナー夫妻が同じテーブルで、泊まり客と一緒にごく普通に食事をするのだが、おいしいものを食べながらの話は自然と弾み、情報交換にもなるし、なにより旅人を和ませてくれる。

廃屋の裏には静まりかえったオホーツク海に
研ぎ澄まされた水平線が広がっていた





サロマ湖の砂州 三里浜キャンプ場 左オホーツク海 右サロマ湖



大町桂月が三里浜に来た時の碑

7月26日(土)

さろまにあん—D103—R333—R242—遠軽—R333—野上橋—R333—R242—留辺蘂
—R39—石北峠—R39—層雲峡

層雲峡ユースホステル

(154km)

【雨の石北峠】

さろまにあんで出発の儀式をした後、もう一度、湧別川でのフライフィッシングに向かった。今日の湧別川は水も澄んでおり、水量も丁度良く、絶好の浅瀬には釣り人もいない。しかし、結果的にフライフィッシングのキャストの練習をただけに終わった。おかげでフライを目的のポイントに的確に入れることができるようになったが、ピクリともしない。1時間やっても同じなので、ここには魚がいないのだと諦めてやめた。空模様が怪しくなってきた。これから行く予定の方向の空が真っ暗になっている。温根湯でお昼を食べ、世界一というからくり時計を見て走り出したら降り始めてきた。石北峠が近づくとつれ本格的な雨となり、バイク走行には危険となったのでスピードを落として走った。幸い後続車両は無いので安心して走った。しかし、石北峠を越えた途端、雨脚は激しくなり、視界不良となり走りにくくなった。ヘルメットのシールドの外側は水滴防止剤を塗ってあるのでよいのだが、内側に回り込んだ水滴が邪魔になり路面がよく見えなくなってきたので、後続の車を先にやらせたりしてスピードを落として走った。大函駐車場の建物の軒下に入り、シールドの水滴をきれいに拭いた。今日の宿の層雲峡ユースホステルはすぐそこののだが、なかなか雨脚は弱まらない。意を決して降りしきる雨の中に飛び出した。普段は走りにくい層雲峡の長いトンネルはこういうときは助かる。

雨のため、途中の道草ができなかったのでユースには3時前に着いてしまったが、完全にズブ濡れ状態だった。しかし、防水が効いているため中までは濡れていない。ユースのオーナーが雨具の乾かす場所を教えてくれたが、こういう何でもないようなことが旅人には有り難い。入り口にカスタムのバイクが止めてあったが、広島からの若者のバイクだった。チェックインは3時半からなので、その若者と旅のことを話していたが、なかなか好感の持てる若者だった。

ユースの温泉もよいのだが、ここに泊まるときは隣のホテルの温泉に入ることにしている。屋上の露天風呂ではなく、2階の内風呂に入ってみたが、閉鎖的ではあるが広くゆったりと浸かれ、雨の中の走行による緊張がほぐれた。



湧別川のポイント

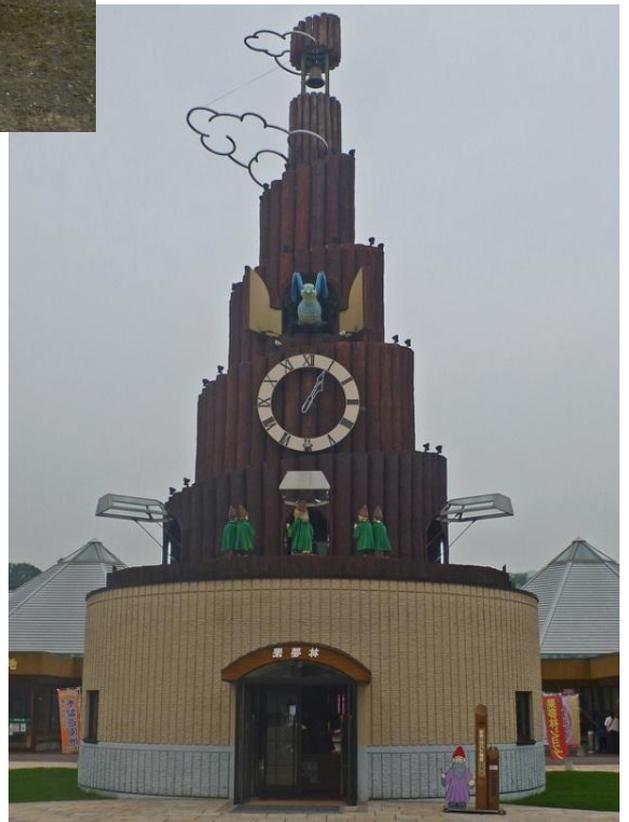
夕食は広島からの若者と食べたが、見た目は若いのが38歳だった。北海道は初めてだし、ユースに泊まるのも初めてで、北海道は走っているだけで楽しいと言っていたが、その気持ちはよくわかる。自分もそうだったが、そのうち、それだけでは勿体なく感じるのと、物足りなさを感じるようになるのだ。ただ、人によるけれど、走りだけで良いと思込む人は視界不良になってしまうのではないだろうか。

関水さんより、もう旭川に到着した旨の電話が入り、いよいよ明日は合流だ。外は嵐、予報でも明日は大変な嵐の一日になりそう。



「さろまにあん」の前でオーナー夫妻と出発の儀式

温根湯の世界一のからくり時計





クリストの「アンブレラ大作戦」か、と見紛う景観。農家の人達はこのように、アースワークの「作品」を無意識のうちに作っている

7月27日(日)

層雲峡ユースホステル—R39—愛別—D140—当麻ロードオアシス—D140—D37—R452
—D580—D70—D581—D759—R237—富良野北の峰 ロッチ・アイガー (122km)

目を覚ますと、天気予報が嘘のように雨があがっていた。しかし、束の間の晴れで、すぐに雨が降り出した。ユースのオーナーと登山や釣りの話しをした後、開き直って雨の中を走り出した。かなりの勢いで雨は降っているが、昨夜、ヘルメットのシールドに入念にレインブレイカーを塗ったおかげで、視界は確保することができた。雨が降っても視界さえ確保できれば、スリッパは気になるもののさほど苦痛ではない。しかし、時速70km以上の速度で走ると内側に雨が巻き込まれ、シールドの内側に水滴が付いて視界を悪くしてしまう。国道39号線と高速道が交差する高架橋の下で止まり、雨宿りをしながらシールドをきれいにした。

当麻ロードオアシスに着くと、松田さんが約束通りお昼の弁当を用意してくれていた。手作りの弁当で、おかずの種類が多く、量も丁度良く、大変おいしくいただくことができた。雨で体が冷えたこともあり、温かい汁物でもあればなお最高と思うのは贅沢で厚かましい限りだ。

丁度、春日さんとも連絡がとれ、薄曇りのむかわ付近を気持ち良く走っていると言っていた。こちらは雨だし、そのうち雨に降られるよと教えてやった。松田さんのおいしい弁当のおかげで、お腹と気持ちも一杯になり、さらに激しくなった雨の中を走り出した。



松田さんの手作り弁当

国道をバイパスして、交通量の少ないいつもの山道を慎重に走り、2時にロッジ・アイガーに到着。すぐに風呂に入り、すっかり冷えた体を温めた。そのうち、春日さんが雨の中を無事到着した。雨の中を走ってきたわりには、何事もなかったような平気な顔をしているから大したものだ。79歳とはとても思えない元気だ。旭川から来る予定の関水さんは、叔父さんの件と、豪雨のために明日早朝に来ることに変更するとの連絡が入った。7月なのに雨の中を走ると寒くなるし、明日の予報は晴れなのでそのほうが安心である。今宵は春日さんとアイガーの佐藤さんと3人で楽しく飲むことになった。春日さんは、ここまで元気に走ってきた余勢をそのままに絶好調である。

7月28日(月)

ロッジ・アイガーR38—D135—R452—桂沢ダム—D116—三笠IC—道央道—手稲IC
—R5—小樽—R5—余市—R229—美国・余別 民宿「新生」 (217km)

【今年も元気に熟年ライダー集合】



富良野 ロッジ・アイガー

昨日の天気が嘘のように雨はあがり、爽やかな風が吹いている。予定通り関水さんは到着して、ようやく3人が揃った。そして、積丹半島を目指して行くことにして、宿は行ってから決めるアドリブの旅にすることにした。いつものように自分と関水さんと春日さんを挟むようにして走り始めた。昨日までの走りとは違い、後方確認の割合が多くなったが、雨上がりの爽やかな山道を快調に走った。三笠アンモナイト博物館はたまたま月曜休館日だったが、休憩を兼ねて屋外の炭鉱遺跡などを見学した。三笠から道央道に入ったが、風がかなり強く、ハンドルを取られる。

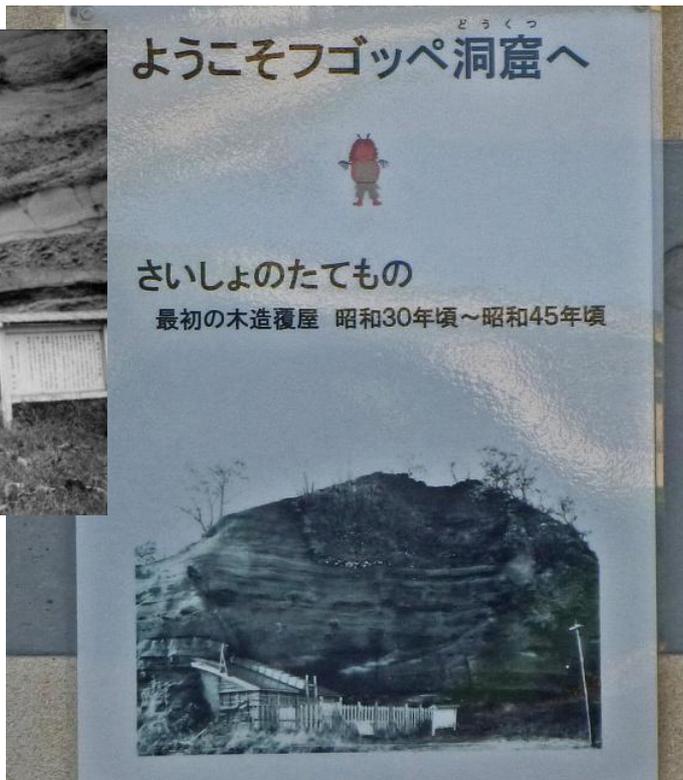
野幌PAで休憩したが、札幌自動車道は海岸線を走ることになり、これよりも風が強くなる可能性があるので、札幌の街を過ぎた手稲で国道5号線に下りることにした。小樽を過ぎ、余市の手前でフゴッペ洞窟に寄ったらここも休館だった。フゴッペ洞窟は北方民族の遺跡で、独特の象形文字と絵画が有名だった。学生の頃、自転車で北海道を回ったとき、岡本太郎の縄文の世界に興味を持ったのに関連して、古代民族の文化に対して関心を持っていたので、まだ知名度は低かったフゴッペ洞窟に立ち寄った。46年前のことである。

そろそろ今日の宿を決めなければならないので、良さそうな所を訪ねたがどこも満室と断られた。仕方が無いので美国の観光協会に行って探してもらったが、ことごとく満室と断られた。観光協会の人良さそうな小太りの若い女性が「ここだったら空いているかも知れない」と電話をしたらOKだった。この流れからすると期待をもてそうな感じはしないが、泊まる場所を確保しなければならない。その宿は神威岬の少し手前にあったが、店構えを見て、直感的に「当たり」と思った。3人なのに10人は泊まれそうな部屋に案内され、早速風呂に入って体をほぐした。そして、人の良さそうな宿の若旦那が、「岬に行くんなら店の軽自動車を使っていいよ」と言ってくれた。それではと軽自動車で神威岬に行ったが日没まではまだ時間がありそうだし、7時までに帰らないと食事の時間に遅れるので早々にして帰った。食事のメニューは少ないが、一品一品が充実している。タラの昆布締め、甘エビ、ブリ、タコ、ホタテ、そしてなによりマグロの刺身が最高。あまりのおいしさにマグロの刺身を追加注文したほどだ。気仙沼でマグロを扱っている春日さんが「このマグロは本当においしい」と唸るほどだから間違いは無い。そして、積丹沖でマグロが捕れることも初めて知った。今はメジマグロだが、10月頃には本マグロが捕れると言っていた。最後にウニ鉄火丼を食べたが、ウニの旨さもさることながら、マグロの旨さはウニに負けることも無く最高の一品だった。3人揃った最初の夜だし、外に出て飲みながらも少し話そうと外に出ようとしたら、8時前なのに外の店は閉まり、暗闇の中に信号の灯りしか見えない。強風の中を走ってきた疲れが一気に出了らうので、今日はもう寝るしかない。



自分が自転車旅行をしたとき撮った写真(1968年)

館内に掲示してある写真を外から撮った





積丹・「新生」の絶品、ウニ鉄火丼と刺身

7月29日(火)

余別・「新生」—R229—神威岬—R229—岩内—D66—(ニセコパノラマライン)—D58—
ニセコ五色温泉—D66—ニセコ昆布温泉 鯉川旅館 (97km)

関水さんが朝早く起き出したようなので、自分も起きて外を見たら、朝陽がすでに昇ってきていた。急いでカメラを持って外に出たが少々遅かった。余別港からは一斉にウニ漁の船が白波を立てて沖に出て行った。途中、関水さんと会ったが、それぞれのコースを1時間あまり歩き回った。宿に戻ってみると、若旦那が外に出てきたので話しをした。「新生」は30年前に出来て、途中改装して現在に至っているとのこと。タベのマグロのことを褒めたら、この海でもマグロが捕れ、「オヤジが釣るんだ」と誇らしげに話してくれた。今はメジマグロだが、もう少しすると本マグロが捕れると言っていた。メジマグロが大きくなると本マグロになり、クロマグロともいうことを教えてもらった。タベは12名で満室、昨日は0名、一昨日は50名で大忙しだったと話していた。

今日の予定走行距離は短いので、おいしい朝食をおかわりしながらゆっくり味わって、のんびりと出発の準備をしてから、神威岬を目指した。駐車場から岬の突端までは歩いて20分ぐらいだが、時間はたっぷりあるので、遠回りして散策路の一番高い所まで登ってみた。これから行く予定の神威岬が眼下に見渡せる。岬まではアップダウンがかなりあるので、春日さんは入り口のところで留守番をすることにした。関水さんと二人で歩いたが、良くこんな所に道を作ったものだと思いながら、強風で煽られないように気をつけて歩いた。強風でさざ波が立っているせいか、積丹ブルーは本来の青ではなかったようで期待外れだったが、ウニ漁をしている小舟が絵になっていた。切り立った岬の先端に立つと、風の強いこともあり、身の危険を感じるほどだった。そんな中、関水さんはすれ違う人達に声をかける。特に若い女性には必ず話しかける。傍で見ていると本当に人間が好きなんだなあと思った。

R229 号線の雷電国道はトンネルだらけで、美しい海岸線の眺望を楽しむことはできない。襟裳岬の黄金道路もそうだが、機能優先の道路作りは経済効果の面では必要なのかも知れないが、旅人が楽しむ余地を残す考えは受け入れられないのだろうか。

ニセコパノラマラインのワインディングロードを快調に飛ばし、途中バイクを止め、30 分ぐらい歩いて神仙沼に遊んだ。ニセコ山中の湿地帯にひっそりと静まりかえった沼がある。周囲のエゾトドマツが湖面に映り、足下には水草が茂る。数組の観光客が去り、我々3人だけになって静寂に包まれ、鴨の親子が湖面に輪を描き出した。去年は連日300kmを越える長距離走行だったが、今年はあまり距離を走らないで、途中でのんびりとした時間を大切にしようという趣旨だから、このようなことも出来るのだが、年齢を重ねれば重ねるほどこのような旅は意味を持つようになる。

関水さんは、青春の思い出のある五色温泉にぜひとも入りたいというので、ニセコ五色温泉に立ち寄った。自分も若かった頃、ここでキャンプをして混浴露天風呂に入った。しかし、湯は同じ強酸性だが、露天風呂も新しくなり、当時の面影はない。その当時、キャンプ場の流しの冷たい湧き水に肉を冷やしたまま近くのイワオヌプリに登り、戻ってバーベキューをしようと思ったら、冷やしておいたはずの肉が無くなっていた。この中のキャンパーの誰かが食べやがったかと疑心暗鬼になったが、キツネの仕業とわかったのは後からだった。関水さんはなかなか風呂から上がってこない。青春時代の思い出に耽っているのだろうが、余程の思い出があるようだ。

【日本秘湯の会の宿・昆布温泉鯉川温泉旅館】

昆布温泉・鯉川旅館に着いたのは 4 時を過ぎていた。自分は早速、この温泉の自慢の露天風呂に入ろうと思ったが、関水さんと春日さんは五色温泉で長く入りすぎたためか、気が進まないようだった。「ビールを飲んで一休みしてから入ろう」と言っているが、自分は露天風呂に入ってからビールを飲みたいと一人で入った。滑滝が目の前に流れ、周囲は混合林の天然林が広がっている本当の露天風呂だ。湯は少し茶色がかかり、温めなので長湯をしながら周りの木々を眺めることができる。残念なのは、大きな露天風呂の浴槽を真ん中で仕切り、男女に分けていることにより、せっかくの景観が損なわれてしまっていることだ。仕切りを無くし、時間制にするとかで、この最高の環境を生かすようにしてもらいたい。後で、このことを女将に話したら、「心ある方ばかりではないので苦慮しているのです」と言っていた。風呂から上がり、帳場で冷えたビールをもらい、部屋に戻ると二人はまだビールを飲んでいて、「せっかくビールを用意して待っているのに遅い！」と怒れる始末。意に介せず、「風呂上がりのビールを飲みたくて、途中の喉の渇きも我慢して来たんだ」と冷たいビールを飲んだが、最高の満足感が体中に広がった。「そんなことより、早くここの温泉に入った方がいいよ」と二人を送り出した。しばらくして部屋に戻るなり、経験豊富な春日さんは「日本にまだこんな温泉が残っていたのか！」、野草研究家の関水さんは「成分が完全に融けすぎているくらいだよ！」と最大級の褒め言葉の連発であった。事前に鯉川温泉の露天風呂の様子を話していれば、五色温泉で長湯はしなかったのかも知れないと反省したが、アドリブの旅だから仕方ない。

この膳付きの夕食が部屋に運ばれてきたが、今時、部屋食で、しかもこの膳つきなどは珍しい。食事の内容もおいしく、何よりも、鯉川温泉で出す酒が「鯉川」で、それが庄内・余目の酒なのが嬉しい。上品な感じの女将が入ってきたが、ここからは関水さんの出番だ。ごく自然に女将の生い立ちなどを聞き出し、話を盛り上げていくあたり、一つの才能だ。話しによると、女将は岐阜・高山の出身ということだったが、すかさず関水さんは「だから、何となく品があるのはそのせいだ」ともちあげた。息子も旅館を継ぐために東京から戻り、一安心とのことであった。こういう雰囲気のある宿を末永く残してほしいものだ。



粋な「新生」の若旦那と店(下)



ニセコ五色温泉





神威岬の夕陽



余別港からの朝陽



神威岬



ウニ採りの船



鯉川温泉旅館の夕食



最高の鯉川温泉旅館の露天風呂



【鯉川温泉旅館】



かっこいいんです～

2014-07-31 10:00:00
テーマ：かっこいい物情報

まずは、見て下さいな。
ほら！



かっこいいでしょう～。

ハーレーのサイドカーに乗ったおじ様、お年はいくつだと思いますか？

な、なんと**79才**ですって！

私の父も、その昔サイドカーに乗っていたので
父の思い出がよみがえります。

昨晚のお食事の際にもそんなお話をさせて頂き、盛り上がりました。
サイドカーのおじ様の他にも二人のライダーさんも一緒にいました。

2014/10/3

かっこいいんです～ | 鯉川温泉 北海道ニセコの日々



このお三人さま、お酒もめっぽう強くて、お食事でもリモリモリ召し上がって。
だから、元気なのですね。

日本の男子よ！こうでなくっちゃ！って思いましたね。
「道中、お気をつけて下さーい、ありがとうございました～」



湿原を行く春日・関水両氏



神仙沼



神仙沼手前の日本庭園のような沼

7月30日(水)

昆布温泉・鯉川温泉旅館—D66—D97—京極・ふきだし公園—R276—道の駅・フォーレスト276大滝
—支笏湖—R276—苫小牧—R36—D259—苫小牧フェリーターミナル ～～ (132km)
～～太平洋フェリー「きたかみ」～～

朝、露天風呂に3人で入った。今日も天気は良く、清々しい朝の空気を吸いながらの露天風呂は最高の贅沢だ。朝風呂でお腹を空かしての朝食はことのほかおいしい。

出発の時、女将が写真を撮らせて欲しいと言いながら、自分のお父さんが、春日さんと同じようなサイドカーに乗っていたと懐かしそうに話していた。その当時、サイドカーに乗っていたと言うことは、それなりに裕福な家だったと思う。その時の写真が女将のブログに載ることになった。

風もなく穏やかな天気ではあるが、霞がかかり端正な羊蹄山の姿は良く見えないのが残念である。京極にあるふきだし公園に行ったら、韓国、中国からの観光客で賑わっていた。

その後、支笏湖湖畔を散策して、苫小牧フェリーターミナルの前で関水さんとは走りながらお別れをした。

彼はこれから三国峠越えで旭川の叔父さんの家に帰ると言っていたが、到着はかなり遅くなるだろう。彼の頭には時として時間の経過の感覚が麻痺するときがある。時には良い場面に出くわすが、時には辛い思いをする羽目に陥る時もあるが、それを楽しむだけのパワーを備えている。余裕でフェリーターミナルに着いたので、コーヒーを飲みながら寛いだ。夕食は船のレストランで、春日さんはビールで、自分は赤ワインで旅の無事と今年も去年とは違う充実感に感謝して乾杯をした。春日さんはもう来年の話しをしているが、80という年齢が気になるのだが、本人は全く気にしていないし、タベの鯉川旅館の女将が、「82歳のバイクの人も元気に来ましたよ。」という一言で勇気もらったようだ。今回、一緒に走っていて年齢のことは感じさせないし、元気なことは確かだが、正直心配である。



羊蹄山をバックに3人の記念写真

7月31日(木)

～太平洋フェリー「きたかみ」～仙台港フェリーターミナル 一東部・南部自動車道一自宅 (25km)

仙台は蒸し熱かったが、雨は降っていない。春日さんはこれから気仙沼まで走らなければならないが、自分は30分も走れば自宅なので申し訳ないような気がする。家に着いても三週間の旅をしてきたような感じはしない。自分の日常生活は、ひよっとするとある意味、旅を続けているのではと思えた。

あとがき

第一の目標の登山は、天候の回復を待つて二日間延期したため、予定した縦走を完全に達成することができた。普通、二泊三日のところを三泊四日にするにより、十分に山を楽しむ精神的余裕ができ、自然景観の観察にも目が行き届き、自分なりの考察を重ねることができた。従って、山行中に苦しいことはほとんど無く、特に、コマドリ沢分岐からの急坂は、一度も休まずに登り切ることができた。それは、荷物の軽量化のためでもある。去年は25kgで苦勞したが、今年は徹底的に軽くしようと、使うかも知れないと思われるものは全て割愛した結果、ザックだけだと10kgまで軽量化できた。これに水2L とカメラ一式3kgを足して15kgとすることができた。一眼レフでなく、コンパクトカメラにして、三脚も使わなければ更に軽くすることができるが、写真の可能性からするとやはり一眼レフは必要だし、三脚も行動記録を撮るのに必要だ。

体調面においては、天候に恵まれた中での行動だったため特に問題はなかった。単独行のリスクはあるものの、逆にそのために行動が慎重になり、危険防止に繋がったと思われる。とにかく、天候の判断が楽しい山行の全てと言っても過言ではない。それにしても、トムラウシにとりつかれた人達の多いのに驚く。日帰りコースのトムラウシ温泉からでも、朝の3時に出発してくると言っていたし、後は縦走するしかない奥の深い山なのである。

自分にとって山登りとはなんなのだろう。高校、大学で山岳部に入って山登りをした経験もなく、山の知識はほとんど自分の経験からでしかない。鳥海山の麓に生まれ育っているながらも、初めて鳥海山に登ったのは40になってからだと思う。生まれながらにしてそこにあった山は、眺めることはあっても、登る対象の山とは考えなかった。学生の頃は、近くの低山に遊んだ。登山道のない猛烈な藪を鉋で切り開きながら登ることを楽しんだり、せいぜい安達太良連峰の縦走ぐらいだったが、北海道一周の自転車旅行をしたとき、利尻山に登ったのが本格的な登山だった。しかも、現在は危険で立ち入り禁止になっている鬼脇コースから南峰に登ったのである。生死の危険の中での登山を経験したおかげで、その後の登山はそれほど辛いと思ったことは記憶にない。層雲峡から、ロープウェイを使わずに黒岳に登り、北鎮岳、旭岳、北海岳をほぼ走り、その日のうちに層雲峡まで下りたのが、一番体力のあった頃だったが、今では考えられない無謀でしかなかった。北海道の山に惹かれたのは、大地の広がり、圧倒的な空間の大きさのためである。白雲岳から旭岳、高根ヶ原、トムラウシ山を見渡す大地の広がり押しつぶされそうになるし、空間が大きすぎて息が出来なくなるような圧迫感を感じる。これらの経験が自分の作品作りのバックボーンとなっている。

年のせいなのか、バイクで走っていて感じるのだが、動体視力が落ちてきているようだ。それに、今年の北海道の警察は交通取り締まりに本腰を入れたようで、10kオーバーで捕まったというライダーもいるくらいだ。そんなわけで、交通規制プラス10kの速度で走ることを心がけた。その結果、周りが今まで以上に良く見えるようになったし、副産物として、バイクの燃費が良くなった。S&SのキャブレターをつけていてもL当たり20km以上の走りをすることができた。

リターンライダーとして走り始めた頃は、一応70まで走ろうと決めていたが、まだいけそう。そして、我が仲間には10年先を走っている人がいるのである。

表表紙 化雲岳より旭岳方面

裏表紙 定宿「ロッジ・アイガー」

総走行距離 2350km

